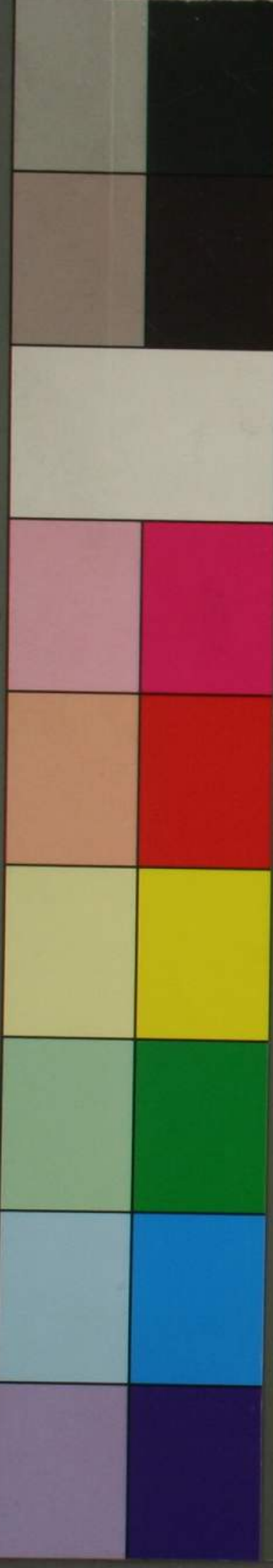
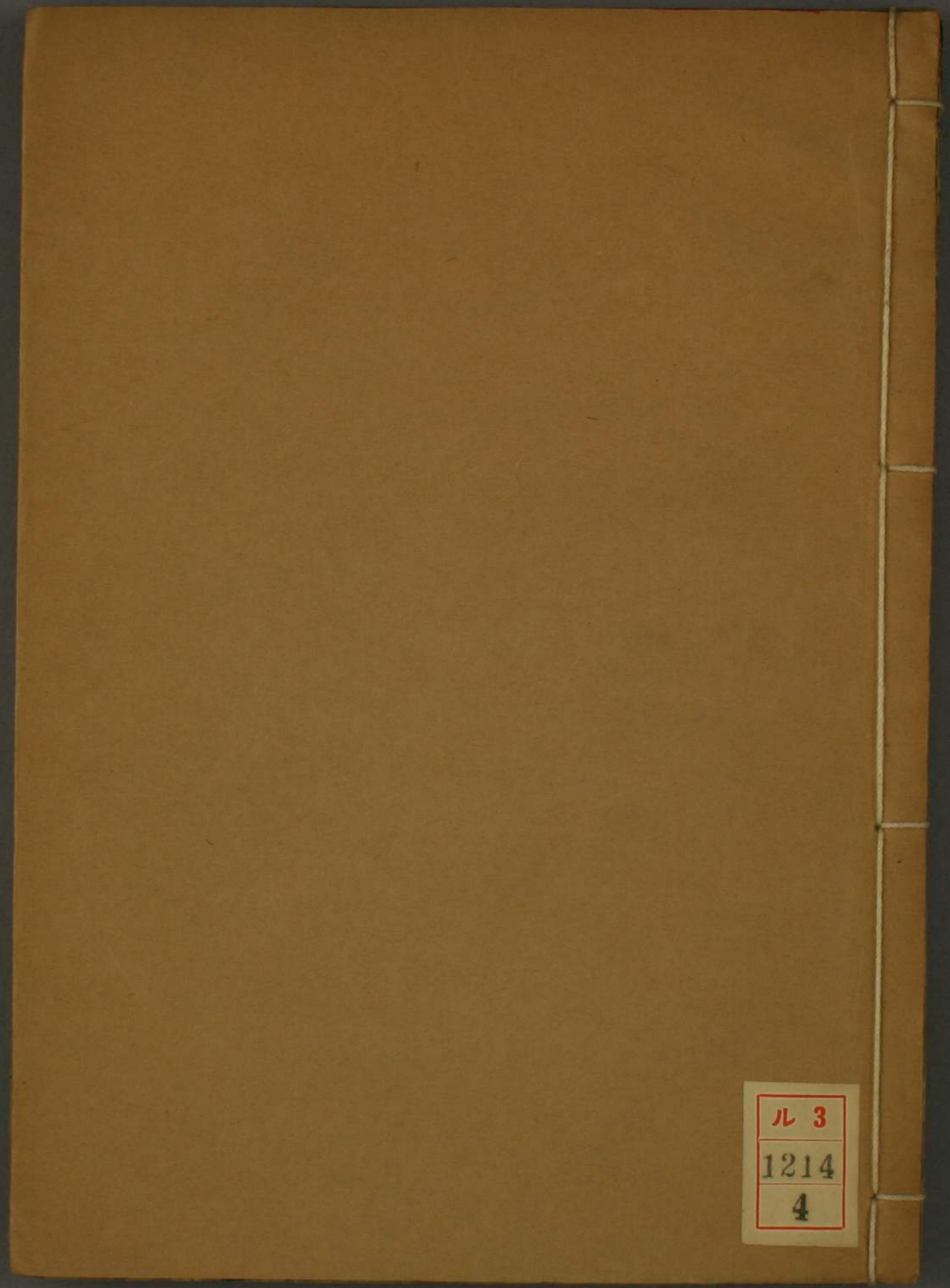


KODAK Color Control Patches
LICENSED PRODUCT
© The Tiffen Company, 2000



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



ル 3
1214
4



卷四

東海道平定ノ勲

四

前坂、新居、白波、二河
 吉田、五井、赤坂、友河
 畠山、沈野、崎海、安田
 新居、赤坂、赤坂、初丁
 張文、長公、十丁
 馬方、口、福、照、氏、妻、り、直、景、十、辛、日
 今、川、義、元、藏、田、信、長、大、軍、十、九、日
 換、田、の、神、揚、重、妃、の、化、驗、鏡、此、丁、日
 右、巻、の、経、馬、の、足、修、換、此、丁、日

全五冊

ル83
1214
4

1814

Vertical text on the left edge of the page, possibly a page number or title.

Main body of vertical Japanese text on the left page, enclosed in a blue rectangular border.

Right page of the manuscript, showing a large area of paper with some faint markings and a blue binding strip on the right edge.

門 3
流 1214
卷 4

田
三
田
田
田
田

驛路拾卷之四

夜も月乃くも明^かり^まは^らぬ^は深^ふ松^の宿^{しゆく}とす^らお^れら^れし^より
 前^{まへ}坂^{さか}より^の間^まは^らま^さ砂^{すな}中^{なかつ}一^{ひと}足^{あし}は^らく^は一^{ひと}足^{あし}は^らく^は
 かりに^かき^て道^{みち}乃^のら^うゆ^はま^はの^ま砂^{すな}入^いる^まは^らぬ^は
 振^ふり^のゆ^かり^の。若^わ林^のの^の郷^のた^らる^か方^{かた}り^の。深^ふ松^の宿^{しゆく}
 塚^{つか}村^の。多^た陽^の村^の石^のり^の。板^い形^の明^あ神^の乃^の社^の。坪^{つら}井^の村^の
 前^{まへ}坂^{さか}驛^の深^ふ松^の宿^{しゆく}より^の二^に里^り半^{はん}拾^{しゆく}を^の可^か右^{みぎ}方^{かた}と^しら^ると^しら^る
 新^{あたら}岳^の沖^の香^か氣^のの^の岳^の不^ふ毛^のは^らぬ^は深^ふ松^の宿^{しゆく}は^らぬ^は陸^{りく}地^のを^のり^の

順
正
堂
印

驛路拾卷之四

い付のけり中より法眼れ貝類くぬき出て海へ入る具
わくく海へ入りてけ渡り真の山五里わかれおと
大船之出入事ひひありひ今初と若村とめん
便船走わくく渡り船家お中りかむく二十わまり
乃侍上下拾人中中し家かさんと風也立り家せ
て船も通くと云付乃の家男眼りかむとまそて叶はし
ひしりもあくと云は彼侍さよひも実沖程めと如渡
得船と云文わり家船くと五し一とくも一とく夢の二合

小飛舟の侍沖房の何方へ去方へおとらぬぬ今と
乃通なり我おと西國の志なりう使くとわんは越は
半々今帰つる命おと一夜と向ふはいていそく也沖
音し八侍人をもく公れまのけり張乃通を浪浦山愛
しも借し味くまをく一十名利はほさんれ跡を跡
いし海あり心乃知は明しりくはと六増賀か一甲おいと
し死せとて人をもくいさしを渡りく夢のけり
んごりされら風也國て出船小沖とけりあも船

田舎の物語

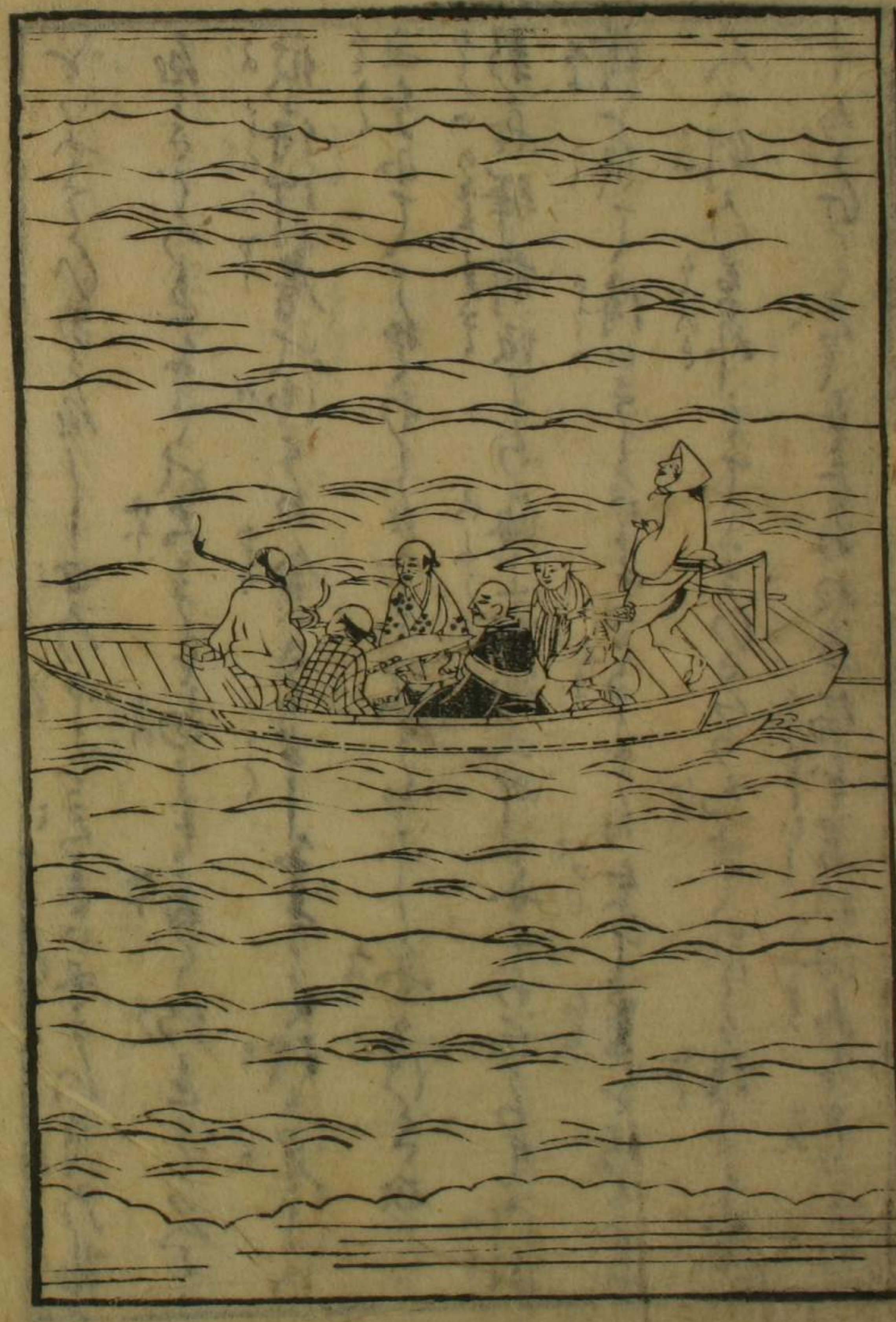
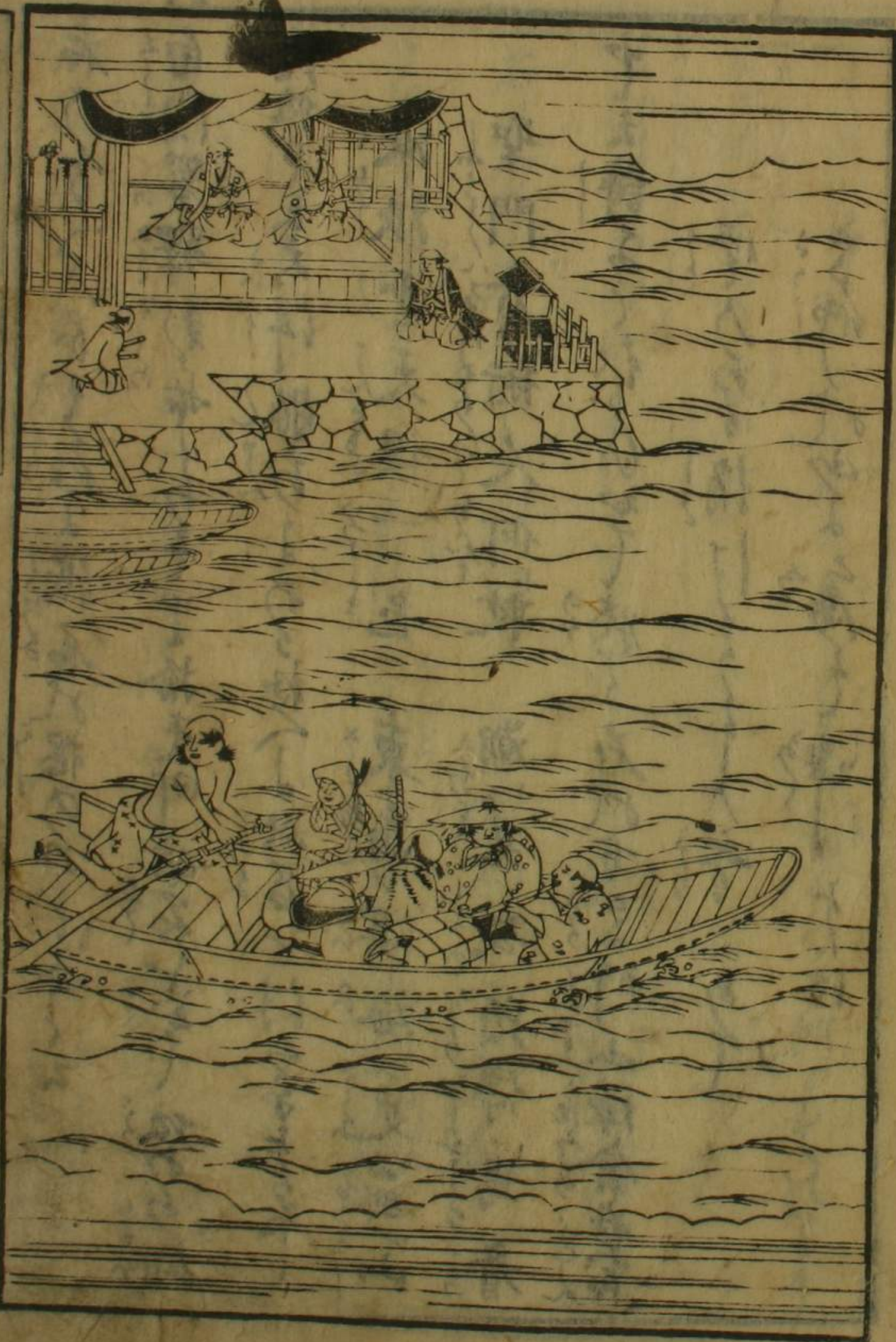
願き一に沖のくちの徳にて智者の愚者ふり
福者の貪ふふあへ一に徳とくして己とけし
のいあんのまは今時大なる沖侍れと見しと
のありの白ひはまはけ道心信をきくやま
ゆきゆひゆきゆきゆきの沖やちゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
侍中てうらまひのそと沖房のゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

いかにとまへ一にのちふまくと見おし
い河はまてまわんとたまへて風也それい
とまへてまへてまへてまへてまへてまへ
とまへてまへてまへてまへてまへてまへ
ハ飛りまへてまへてまへてまへてまへ
新くまへてまへてまへてまへてまへて
人まへてまへてまへてまへてまへて
新くまへてまへてまへてまへてまへて

新くまへてまへて

とては人面を削りて谷傍に可なりと云ふは
さうゆふらめ又或人鳥の聲に可なりと云ふは
けりありてさて夏の比すとも晴しと云ふは
又傍よりけり人それ鳥の聲に可なりと云ふは
まらしと云ふは鳥の聲に可なりと云ふは
くまの鳥の聲に可なりと云ふは
のれ長おれと云ふは
おれの鳥の聲に可なりと云ふは

とては人面を削りて谷傍に可なりと云ふは
さうゆふらめ又或人鳥の聲に可なりと云ふは
けりありてさて夏の比すとも晴しと云ふは
又傍よりけり人それ鳥の聲に可なりと云ふは
まらしと云ふは鳥の聲に可なりと云ふは
くまの鳥の聲に可なりと云ふは
のれ長おれと云ふは
おれの鳥の聲に可なりと云ふは



右乃方へ入ふと名は漢名に橋のわくと云々云

白頭賀驛新橋より中里拾毛河は宿とて坂わり瀬

見放と云大洋脈ありあつた人々此名と付る事ありし

波浪雲天俱一色 東南溟海更無山

聖門有術人何敢 潮見坂頭停馬者

中云詩をくわいおして勝る右れ方を河山源倉石

雲のりも指けりりり奇こりて

さゆり代少よ庭も叫りては

しりし橋より。さる宿。橋より橋より二河もてれり

を列と列乃橋川を

二河驛白波賀より二里六町。おは伏。大岩村いづら坂

右れ方小石巻山と。いじも。二連木若ハ二連木より

うねりけ味わりの吉田へもたけりも道。朝倉川

と小河わり

吉田駅二河より一里す河宿乃内右の方より城

此城内より常長條城進み此門わり大岩をり橋を

乃ちとむ毛とむ牛門とく可くらきよ橋わりの長さ右
小原の河氷と八位筋よりか長藤根と海へ橋門
れとそより小原の親もいよと倚も品なく云不居毛
より右の海をたけ河よりあまよきと梅列一行揚凡
くく一休い風也いりうい城と梅列今川の
持保也小原肥後を徳実と云人々をたむと竹の橋
小原七本甲子代去南洲と書徳いひとて同本
表見寺より八務友八命と師長照槽坊より小原

彰九命長晟とゆゆ二連木代城と白主友助重秋
同丹波も重貞と園崎より四通と仍て是海野吉高
より押しをとり城兵より下地より出て攻取河よりあま八
命忠勝味共く一番と徳と合と略屋中忠親園討
死と小原肥後を能防てあふと喜取な多夫八命戸
田主友助と素心者より酒井左衛門尉前将中政より
城堅固中多幅くあふ死友より酒井忠次諫といく
和と入六月日小原城とつきて梅列より常城より

河井左衛門尉忠治と名流の同子長左衛門尉家次が徳天
正十八年池田三左衛門輝政より松平吉蕃の家法に
民於少備忠信松平より教以忠利水野隼人正忠信水野
監物忠若小笠原忠房も忠若同山旅も長左衛門今を後
も長治より三代めでい。下地村。石田村。小坂井
は下は八幡の風地云々の某若らり。時以迄と通
り。江の島より常の先年はわたり。龍もさよと
は八幡の島若井。は家屋をく。郷く。巻上げて海上

里中に行くと也。凡うの卿。さう徳町から松平也。若
う。勝とけて休む。風地は原と下。本林と系と中。也。永禄七
年甲子。は夏。今川刑部左衛門氏。其も方余の軍兵。又
年。三。は。法。河。金。と。ま。て。若。田。の。島。は。陣。と。り。人。殺。お。身
と。ま。て。い。ま。多。百。勝。う。新。る。一。乃。ま。れ。城。と。せ。ひ。け。時。作。協。と。
八幡の島。小。津。旗。と。ま。て。是。津。先。子。い。は。能。系。り。打。お
う。り。氏。ま。い。牛。久。保。と。伊。奈。れ。る。く。備。き。り。物。さ。り。
今。川。乃。旗。下。旗。松。乃。味。を。信。尾。を。常。若。波。實。病。氣。乃

聖書

一と云し陣中より引退し、割新居白濁質と放たせ
 又武田信虎孫列し、もて野山の金さし、昔弟が氏
 長と何しめ後軍勢し、く周章し、く可成入とせし
 是傍勢攻し、くもんと旗の向とあり、さりてさし
 く致ひり、さし冷川方取少と、なす平八郎、忠勝、豊年
 十七一陣し、進し、く若と孫列の兵、殊不助、正保
 伴、東左近、左衛門、祐時、若原、平の定、代、み、後、取、し、て
 の、退、り、よ、な、す、百、助、一、の、え、り、り、案、て、お、孫、利、と、り、

赤坂の道なり
 赤坂驛五井より十六所は、赤坂より、な、り、ぬ、凡、也、男、り
 赤坂驛五井より二里、す、河、た、り、五井、此、古、城、の、水
 祿、の、比、五井、卯、記、と、く、人、居、ま、り、と、云、赤坂、も、て、て、男、赤
 坂、城、の、道、なり
 赤坂驛五井より十六所は、赤坂より、な、り、ぬ、凡、也、男、り
 赤坂驛五井より二里、す、河、た、り、五井、此、古、城、の、水
 祿、の、比、五井、卯、記、と、く、人、居、ま、り、と、云、赤坂、も、て、て、男、赤
 坂、城、の、道、なり

俊惠法師

六月や二村やまふふと

俊法師たたく夢とまうと

とまうと風の所居れあまうあひては八幡社

藤河驛赤坂より二里九所。畠の郷、右の方

大久保村坂傍村たよ土呂酒井村らまはる河此道

郷し。左右田の河、事なまたり大田村。大平村

河橋あり風色は河より一里ほりわ此方吉良の海

小豆坂くりりふ取る天文十一年八月十日今川上総

義元敵田後信秀と合戦ま一場あり坂の四

河、小豆坂志津中七中流とわまのく人

云事、あまの男さふ河より先今川方陣

朝は奈岐中と恭徳同小豆坂、恭徳林除寺此

長老敵田方此先、敵田之命、作廣津田孫

信光、後河橋、あまの勝り尾列方、あまの

比奈小豆坂一帯、法と合とけ時、七中流、河橋

御書

信光のぶみつ織田おだ遠伯とんぱく元任げんにん房下ふろ方保かたやす之命のみこと匡たけのり範のり園のり田のり助すけ爲ため直ちか教のり依より隼人はやと佐勝さかつ通とほ同孫どうそん久勝ひさかつ豊とよ中野なかの又また善勝ぜんかつ也なり義元よしかげ敗軍ばいぐん多おほ少すく男おとこ叔志津おせつ嶽たけ八や佑たすけ也なり正ただ十と年ねん正月しげつ我われ示しめのの國くに主ぬし柴田しばた修理しゆり元勝げんかつ家け退ひき治して

秀吉ひでよし卿きみ列りよよ陣ぢん乃の時勝ときかつ家け甥なまこ佑たすけ久ひさ回まわ玄げん義元よしかげ

盛政もりまさと秀吉ひでよし共とも志津しづ書かめて大おほにに頼たの山やま福ふく傳でん一ひと玄げん

正則ただのり先ま強かしし一ひと番ばん首くびとと相あ七しち本ほん種むねハハ後のち虎とら助すけ

信正のぶただ脇坂わきさか甚おほ内うち安治あんぢ加多かた彦ひこ宗むね嘉明かみ平野ひらの持平もちへい忠ただ奉ほう

所ところ相あ助すけ也なり直ちか盛もり糟そう屋や助すけ彦ひこ石川いしかわ普ふ助すけ此こゝ人ひとハハかかとと是こゝてて以もつ

○おげの郷おげの郷

番崎ばんさき驛えき友川ともがわより七しち町まち尾お也なり是こゝより右みぎ北きた方かたよりより奉母ほうぼ

乃の石城いしがきをを奉母ほうぼ此こゝ里さととと名な不ふ也なり以もつ貞武さだたけ乃の可よ也なり

立た席ざ子こ控かええててゆゆびびささららるる所ところ也なり

ありて乃の里さとよりより白しろくくささらられれは

と乃のくくららとと又また當城たうぢやう天正てんてい十八じゅうはち年ねん田中たなか兼かね光みつ少すく輔すけ吉政よしかげ次つぎ

なすを後のちより廣孝ひろたか同ともを後のちより原重はらむね同とも伊勢いせ守まもり忠利ただとし水師みずし

大なるふる荷と山ろく付て引よていさなり
 彼をせざる方えかりはれ男向ふあると引てあり致
 一に柔よくとまて引のゆる和よそれとまていさ
 て引ひけわりきるとして腹とありとのまろ振蕩と
 八脇あして山家れをばせいらなつてあつてあつて云
 肥する方ハとのまろ腕を引りまろせおとまていさ
 心あにわてわ家れをばせいらなつてあつてあつて云
 て事ゆたかく女方へ引りる風也男よ語りるハ若昭氏

夫れ車せしれ通めて、大士の車よ引連りて何
 ぞうとよりきんたまの車軸ゆきよりたまへいひて女と
 へむとよりよる耐女云やう君子ハ怒と極るは二方と信
 としとまていさ今せまていさ通めて引連りて引車とよく
 とまていさ君の僕等とよく引連りて引連りて引連り
 盡よたし引引車とよまわり極るといひて引連りて引連り
 ともせの僕れあやまりといひていさ引連りて引連りて引連り
 引連りて引連りて引連りて引連りて引連りて引連りて引連り

孫子兵法卷四

十五

十五



理よはしりて云ふなるわしとあん今をわが家根籍も
 多しはた己の威勢しし中を邪なる振出ると人ゆくと
 事わらばははのわての若修日とまうし謙退のまら
 然りしとくをわてゆるまふと亡と今なる方うと
 き一出生今と事なりしと云男まは悪人長びしと
 けきとくもわらと云

八 池鯉鮒驛園傍より二里八河。わしや村。いし河は系
 屋風也所所よ若ハ小家ニ三軒わらしう近ふは名屋

たり今いく點くならはる。今屋村。三列尾筋の境
 河。河野仙人塚。わらわ村。らんくは不おれと
 河屋形と云はる方し今川義元の墓は後
 河屋形塚と云はる下の方よ今川家臣の塚わらははの
 折紙と桶後間と云風也義元の墓し向て深しは
 となして中けつは殿は後を三列大将は勇猛武器
 の名と地をゆへ冠々非のやうし人なめをけしとあ
 今ハ松乃嵐乃夢勿そハ事そふとのとあし

成田上総及信長とせり滅ししに上洛すつとて一先
 下りて風吹わたりしに信長使とて列まつりて信長
 後程より義秀を以て加勢とてのち上洛して援兵を以て
 勝三郎・信輝・前田右馬助・利乾・兵庫助・實教三人と
 首將として義秀を以てし令の再幣とて之を都令式千
 三百余の軍兵とて向ふ五月九日ゆのく信長とて
 て同土田尾島信朝とて赴つて信長と義元と所
 ひつためし水野・市川・廣忠・山口・海老・出廣・憲・松・檀・玄

藩元友頼は三百四十餘の兵とて丹波に城を築き
 並に佐久ら左衛門親盛とて四百五十餘の兵とて
 添へて吉原寺の岩よこ先梶川平尾重實は田右衛
 助長繁は二百五十餘の兵とて中務に城を築き佐久
 右大守助季盛山田右衛門秀親は百五十餘の兵とて
 根代城を築き新田重利は近江守波公同隠岐守波衛成田
 重基元信平は五百餘の兵とて徳川は千餘の兵とて
 とのち義元の上洛とて遂にひつあへし中務は海軍に

山口は馬助弘家同本内弘とてたすしあよん務しして
 今川へ内通ししを當掛たるお城とてなる助の深
 入し攻落させ今川方より大なる一ハ務長長助孝家と
 入鳴海しハ葛山橋磨る元重之浦たる助義純佐尾を
 前も頭茲法井小田而政盤返田掃給助實重今川
 中務丞義季し一八千の軍兵と添てし一重し
 今川先陣を引井岩の城と井伊信濃を直教

之を乃城し引し五月十二日大將今川義元ハ四方余乃
 軍兵引率して後府とあきて同十六日池裡給り
 陣とすりしより同十八日後引の先子徳澤丸根
 たる城とすりし取系丸根の城と佐久ろ又學助山向者丸根
 へ防てあし門松平長四郎正親なる力給九市直
 主見又藏其外又學討ししり同十九日寄子又丸根の城
 とすしひし取し城の勢となくとわし子と入者又勢
 ありしり卷責けりあわやうとすし一佐久ろ又學助を死

御とて信州へ援軍遣はし其月一城兵のほろ防
 戦討に決して佐久野大學助山田重九郎城と相争
 立退り義元ハ海内近邊補修る云あり陣と
 ありて丸根城のり丸根信州へ来りて警備
 丸根の城敵の丸根よりこもる行ゆく落味とては
 若くは信長信長の諸士と集りて酒宴して居たり
 してせんといひ強き一々も是後すらくありて一交
 ありて是時信長ハ佐久野大學助山田重九郎戦うあり

命と仰じと先と救はん信長弓矢と立て何れを
 むきと他向て義元とて此合戦とて散次軍門
 ありてはさきものとして十九日午の刻卒切は是
 て櫻田の方へは伏しと丸根の城落ちあり信長一
 騎中にも丸根城と交せん其後丸根丸根軍勢
 逃くよとせ来りて丸根のり丸根のり逃行あり
 信長ハとて丸根明神とて丸根のり丸根のり
 居るとして戦書とてせり丸根のり丸根のり

今日本軍は勝利とせむとて難ひしに明神の御文より
 進めりといふと下知せし家元陣は織田造酒見
 信房宗室長門守茂孝長谷川揚屋助義秀佐藤兼八
 長尾身世山越陣も弘毅が友来女正教正同保正而教
 明河尾右る元徳祐同ふ系法吉築田お好も政綱佐々木
 藏助成政九備八前田右馬允兼利池田勝三郎信輝乾

多摩助實教右備中織田大隅守信廣同甲師信賢也去
 行々尾羽乃先子依々隼人正正通子秋四郎太夫又良文也
 今川乃先陣葛山佐中も勝嘉安永伯耆守氏繁繁瀬
 山際陣と強て居るわし一も一也申此期は
 日合我々も一も一も新古河橋の合し一も一も
 周章て取つて討つて一も一も朝比奈小三郎康秀唐原右近忠
 春三浦左も助義就再幣と振て申知と信友今川
 方大勝れて返一も一も合次中一も一も攻戦乃も一も一も信長代子

佐々木入子秋田御成敗討て平らるる雨の刻よ登り尾別方
 岩室長門も貞孝様合しりかむ今川乃共八百二十人討
 とるく之長門も之討てり仍て佐々木秋田家三人の
 首と捕獲るよ付く守義元乃多して地根郷は乃敵也
 政長入軍おわす討て首途しりと佐々木捕獲
 られ少あつ答合たる小松系よ惟幕と捕へ多酒高志路
 娘信長びよりと守て急ぎ中務しり討て一致と多んと
 のしゆし討しり池田務之郎信輝林依波志秀純毛利

新女秀玲等南控六郎勝家多し中川の敵ハ大勝之味方
 と小勝多し此御成敗多し一とあめけ連し信長安始
 と次等より東乃困路と御て長船寺の岩ハ進志たら山
 たる向よ利しと御討の安なるしるの響と信也士率よ
 胃とさせ次白布と御て一様し御巻とさせ行くと御進
 首より合云と御と定はん御よ入て義元の中陣よれ
 とせりよ其れしり夕立とさしりは降てお告すしり火
 後河惣ハ敵のよせ来あしりしり油影しりしり

備し周章しさく下りしをわきまにたてて
 助加季中川合を渡り秀胤毛利河内を秀頼同新友
 信長より五郎政盛をくわのく首より信長より
 家海内山守より保めて山とめりて新陣乃橋より
 三た後可成はる法よあり軍勢と百歩より新陣よ
 新獲よりけりしし騷動とほ下りけり込大のよ
 討よりししし信長は後より甲して下知せし家今川方
 勝るれきよ強しとてさしつへ晴しぬはさうりなり十

方と夫よりしし然田道酒元林作信も毛利新友表に
 備田が守り中東小市而信定を山守と而秋忠同河内
 ち秋季等一もよりりて法と入家義元八床机し信と
 け下知志りしし服部小平を忠治信とては義元
 ハ母の福おしり小平を膝乃口とわら信を山色利
 新友信合て首ととりぬ我元代首并し今川四郎回氏
 けり信お信山山蛇と云左刀と信し信長の實檢し
 入家信長大よ信しし信長勝はくしと云しし



而林依波者大者りきて大ね今川原と云利新女
服部小平を討つる事しと呼ぶ今川方と云て力と落
一縣軍と云一戦し後河邊討し一郡合二子立
百余也尾列方も五百八十余討しけり今川衣歴くか
柳永文内中浦氏正之野半内氏忠清井小守而政敏三浦
大馬助義光原原元政吉田武藏守氏好高山
播磨守元重乾安房守元清江尾民部少輔親良伊
豆權守元利世部甲斐守長定及枝伊賀守氏秋朝

比奈之斗頭秀全所及掃部助正澄原右近忠春同將
忠家同彦次郎忠良年從主水正泰慶西卿内藏助俊雄
夏源修理元繁松平持津守維信及永伯耆守氏繁也
言有馬八光匡松平益於親由温井為人實雅松平次左
信浦由井久他守正信石川新左衛門康登原口兼中守
親由井伊信濃守直教嶋田左京進將近飯尾及前守
頭茲沢田長門守忠頼国崎十善信忠實上和田雲平
光範金井主馬助忠宗長瀬右左衛門長行平岩十之丞

為行平川左邊秋弘福平之佐助忠重等也下方九郎丸
 海泰親ハ同朋林河保と生捕て尾筋ノ石具と銅以家
 依止一寺泰能同小三郎奉秀取名後河決所親範三浦
 右邊つ佐吉忠等凡池鯉鮒水掛 皇寺とて城とてとて
 孫列一寺不忠等長教一人鳴海城ノ指て近
 邊一教と殿ひらるとありゆり。中邊河橋有
 鳴海驛一池鯉鮒一里半拾五町廿夜乃ち右邊
 方一鳴海の古城之吾服寺の寄附也其邊池海也

小付て左の方ノ星橋式古城を風也也一ノ星田也
 之ノ指すり一に天正十二年三月六日織田信雄ハ
 かく水野和泉忠重取つて同十七日為城也
 星橋ノ河川これよりいさりと
 かりえちりやれりかこ
 云云のいしとらるる乃浦と云通光
 浦ノ名目も夕とて
 神ノ子名をく

後醍醐天皇

馬場へてつらふに浦の濱松

ちのちそつらふと年ばかりに

男才くぬ正三位李能

ふよふもあつてゆくをるこ

わさつと月しそつらふに

又いさくし續の候とつらわりの巖河上人

鳴海くそ浪らそつらふに

女ひつとつらふを向てそつらふ

湖行てなつとつらふの跡をよつらふ

松野へそつらふをむとつらふ

なるそつらふの跡をよつらふ

と云ちそつらふの跡をよつらふ

く川橋の○堂寺祝音堂わつらふ

海へそつらふの跡をよつらふ

○戸部村風也なつらふ

男婦入りて一室を成りて○（此の）室の西に一室ありて大なる
家つゝ

櫻田宮驛の海より千里の風也云々の夜舟にいよ

氣のつらむ物ある多しと傳りて明神といふありわ

その朝舟に客ありんと云男をとして宿とする娘の非

しきりて舟の道は此河舟舟の舟に友ありといふ

この男は神の楊妻也ありと云とれよとらふと云達菜

と云ふ人云一風也其後此の言櫻田明神

楊妻也と化して大唐と云ふ一あはけ庵の傍に僅々

石塔をたてて此の塔婆なりと云ふよと云太神の祠也

玄宗の帝と云又曰に蓮菜と云西三所を紀列慈

野後河に安士尾初の櫻田に當社の神神の草薙

乃叙す之又其叙に當国吾湯市村に有と云や也

趣しては沙律よと云一伝説は米ある事と云ふ

或人の非れ神詠と云

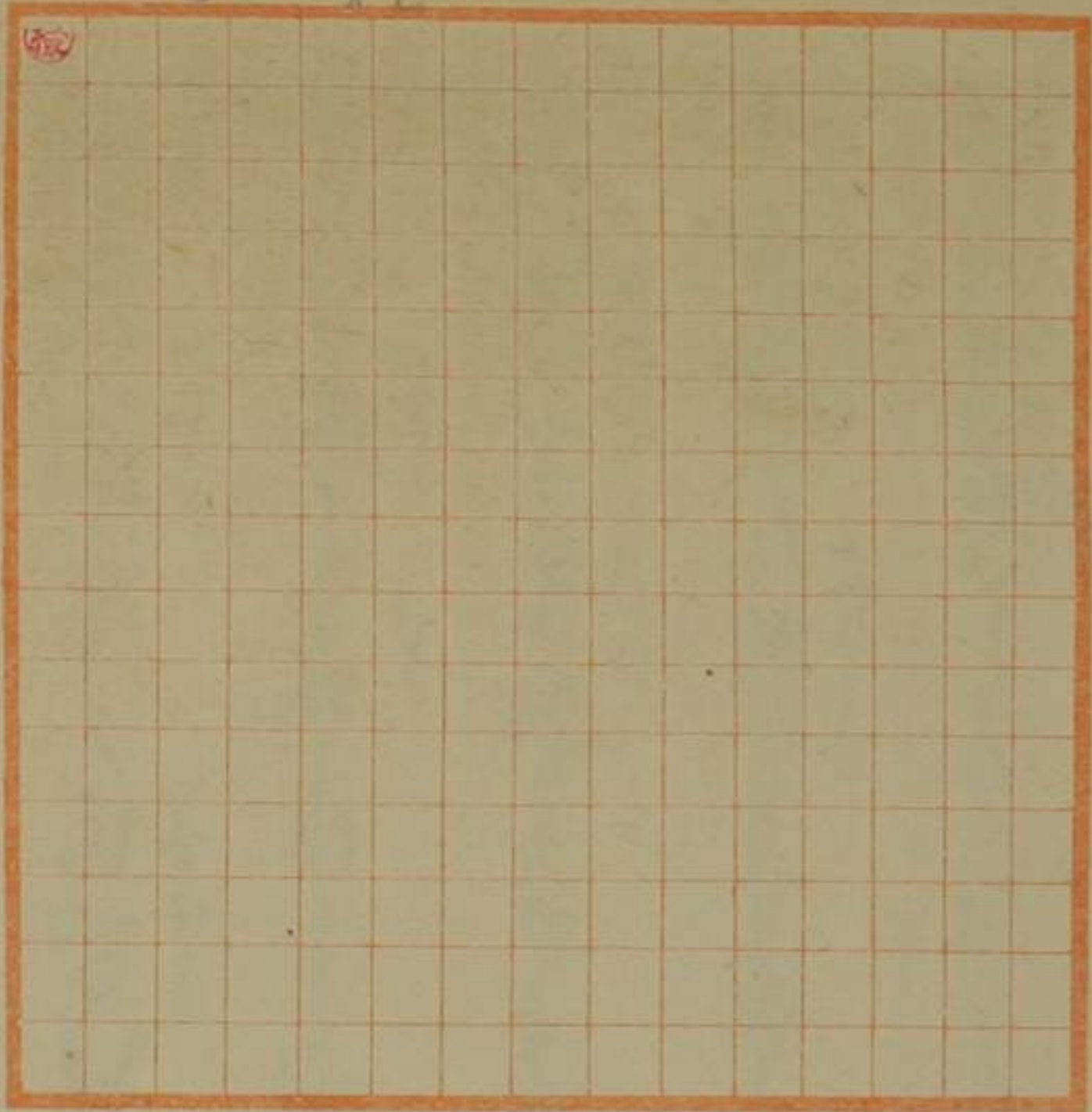
楊妻はらわん娘はらんわさ枝

杉りーかきつる花とたのまん

と流る行舟の舟倉馬とるて繪するよせむくよる形と
むらとさぬくれ繪のらさむ風也すて昔道は神
天王寺へ舟へ久きくは花と持然野おまわりて
本寺へ流る道中へ田舎ね本代下へ宿と夜半お
誘ふる三十余集てあわわおまろく云あきく集る
足揃へーしりおあくら中へいつくくーと云誘はれ
ぬくさりぬ道公わーくわぬひ明てんさハ先倉

そわわわ。古に板へーる航のうささるるさるるは揃へ
道公と信てねる夜もおれりた宿と又あきお誘ふる
しうさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
足揃へーしりおあくら中へいつくくーと云誘はれ
港とさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
清草初名れ誘ふるさるるさるるさるるさるるさるる
廻る極山乃虚空藏の御さるるさるるさるるさるる
捉身延山張付は書らるる白鷺さるるさるるさるるさるる

3年12月



彈後記卷四終

彈後記卷四

さうと云わね不思後ら世よあうく一風色先年正月

十四一け所よあうりて明神よあうりてけつよけつが園

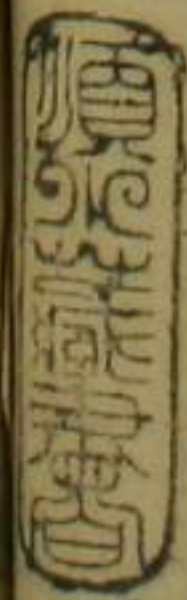
いほひつらあうりてあうりてあうりて

いけりてあうりてあうりてあうりて

あうりてあうりてあうりてあうりて

あうりてあうりてあうりてあうりて

あうりてあうりてあうりてあうりて



一と云わたり不思法に世はあつて風色は年二月
 十留一け所はあつて明神はあつてけつよけのあつ
 りたあつてと違つてはひひあつてあつてあつて
 八明朝はひ所はあつてあつてあつてあつてあつて
 川もと中比らとあつてあつてあつてあつてあつて
 一減はあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 野の辺はあつてあつてあつてあつてあつてあつて

理名抄巻四終

